Japanese Association for Religious Studies

母廟」など「聖母」の名を冠して祀られる例が一般的である。我が国でも神祇信仰において、天妃社に「天妃聖母神社」としてこれを祀る例が見られ、これは鎌倉時代以降、神功皇后を「聖母大菩薩」「聖母神社」などとして祀る従来の日本の聖母信仰とは趣を異にしている。これは、日本の聖母信仰を考える上でも興味深い事例と言えるので、本発表では、媽祖を「聖母」として祀る信仰に注目し、これを日本の聖母信仰のひとつと位置づけて考えてみたい。

神社において媽祖が祀られている例としては、青森県大間町の大間稲荷神社、宮城県七ヶ浜町の旧御殿崎稲荷神社、茨城県北茨城市の磯原天妃山・弟橘姫神社、大洗町の磯浜天妃山の四例を確認する事が出来る。これらの媽祖信仰の変遷を追った結果、媽祖はもともと、中国伝来の海上活動の守護神として祀られ始めたものの、時代が下るに連れて民間習俗、民間信仰に溶込み、信仰の形を変えていることが窺える。これはキリスト教におけるマリア崇拝、仏教における観音信仰や鬼子母神信仰、あるいは日本の神功皇后など、他の聖母信仰にも見られる傾向であり、媽祖信仰もその特徴をよく備えた聖母信仰のひとつであることを、以上の例は表わしていると結論付けたい。ゆえに、日本においても、民間では、媽祖はあるいは普遍的な「聖母」の観念をもって信仰されていたことが窺え、天照大神を聖母として祀る信仰などと併せて考えても、これを日本の聖母信仰のひとつとしてみなすことに何の異論もないように思われるのである。

一九九〇年代台湾の社会変化とアミ族宗教のシャーマニズム的対応

原　英子

一九九〇年代前後の台湾には大きな社会変化がおこっていた。八八年に蔣経国が死去し、本省人の李登輝が総統になったことは台湾社会に大きな影響を与えた。台湾先住民の社会的環境も変化し、行政院原住民族委員会を中心に先住民族の主体性を強化する様々な動きがおこった。それに呼応して先住民族の人々自身が自文化に対する意識を変化させていった。それまで迷信とみられていた先住民族のシャーマンを中心とした宗教も、民族文化のひとつとみなされ、シャーマンも民族文化の継承者と位置づけられるようになっていった。こうした状況について、台湾先住民族、アミ族をとりあげ、その宗教の変化をシャーマニズム的対応という点から分析し、台湾社会との関連を考察した。

まず台湾社会の先住民族社会の変化だが、一九九四年に先住民族に対する公式名称が「台湾原住民」となり、九五年には民族名での名前の登録ができるようになった。九六年には政府行政院に原住民委員会が作られ、先住民族の主体性を発揚するための役割を担っている。九四年に民進党の陳水扁が台北市長になって以降、台北の道路名が周辺に居住していた平埔族にちなみケタガラン大道とされた。また、陳が総統になってからは、先住民族が新たに認定され、それまでの九族に加え、全部で一

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

四族となった。文化事業も九〇年代から二〇〇〇年代に、各先住民族のエスノヒストリーや言語テキストの編纂もおこなれた（林修澈「台湾原住民族研究の新趨勢」二〇〇六）。こうした先住民族やその文化に対する政策は、各先住民族の人々自身に、自文化への関心を引き起こしていった。

先住民族の宗教を執行していたシャーマンに対する意識も変化した。先住民族の文化を保護しようとしたとき、民族行事をつかさどるシャーマンは、民族文化を継承させる者として重要視されるようになった。アミ族ではそうしたシャーマンをシカワサイという。シカワサイは、花蓮市や郷がおこなう祭典や文化祭にしばしば招待され、儀礼を演じた。

しかし台湾社会は依然、漢人が主流を占めている。アミ族にも童乩をする者がいて、漢人文化への志向がうかがわれる。それがアミ族的文化への志向が強まる中、アミ族の宗教者のなかには、シカワサイでもないし、童乩でもない奇妙な神憑りをみせる宗教者が出現するようになっていた。シカワサイは、儀礼のとき魂が神のもとにでかけていき、そこで神世界を飛翔すると考えられている。その間、身体は地面にまるで寝ているかのようにあおむけに横たわっている。この状態を「臥」と「静」として表すことにする。それに対し童乩は、身体を震わせ、頭を振りながら、神憑り、躍動的に動き回る。その状態を「立」と「動」で表現することにする。九〇年代は「臥」「静」と「立」「動」という二種類の形態でさまざまな変化のタイプがみられた。

台湾先住民族の宗教は、漢人社会の影響を受け変化してきた。国分直一の『壷を祀る村』（三省堂、一九四四年）には、戦前廟の前で全身を震わせ失神状態になるシラヤ族のシャーマンの話が出てくる。神憑りの形態そのものは広く台湾住民族社会と漢人の接触という面から考察せねばならない。九〇年代、アミ族で、童乩をすることはシカワサイよりも強力な霊力があると思われていたなかで、アミ族童乩たちが、自分がアミ族であることを示す象徴をシカワサイ儀礼から積極的に取り入れていた。供物や踊り、言語など人により取り入れ方が違ったが、何かしらアミ族であることを示していた。それが神憑りでも「臥」「静」と「立」「動」の間で揺れ動く形態を示していたのではないのだろうか。定型をもたず、個々に違う状況は、アミ族宗教のシャーマンか、漢人宗教のシャーマンか、一九九〇年代の揺れ動く先住民族の姿を映していたとおもわれる。

バリ島の宗教儀礼における トランスと変容力について

磯　忠幸

一九三〇年代のバリ島を調査したマーガレット・ミードは「トランスに陥った者はバリ島の宗教儀礼を特徴づけるあらゆる激しい動作を繰り返す」（『バリ島人の性格』）と記しているが、これまでトランスを伴う宗教儀礼が描写されることはあっても、トランスの意義を詳細に論じてきた研究はそれほど多くない。トランスは、ほとんどの場合アルカイックな要素として

NII-Electronic Library Service